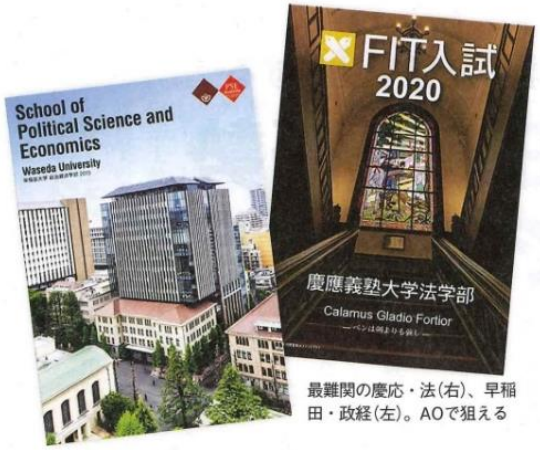
「週刊東洋経済」（2019年5月11日号）の早慶特集で洋々GM江口のコメントが掲載されました！



最難関の慶応・法（右）、早稲田・政経（左）。AOで狙える

入試などがあり一般入試の募集枠が多くないことも、偏差値アップにつながっている。

早稲田では、新しい学部の躍進が目立つ。筆頭格は04年開設の国際教養学部（81）。講義が英語、日本人は1年間の海外留学が必須といったカリキュラムの特徴に加え、就職実績も良好であることが評価されている。偏差値81は法学部や商学部といった伝統学部と並ぶ。

07年に学部改編で誕生した文化構想学部（77）、09年に昼間学部になった社会科学部（80）は、特定の学問分野にとらわれず、科目

一発逆転も狙えるAO 偏差値50の高校でも合格

足元では文部科学省が入学定員の厳格化を進めており、一般入試の合格ラインが上がっている。私学助成金が不交付となる入学定員充足率（入学定員に対する入学者の割合）が段階的に引き下げられ、18年度には1・1倍以上となった。

河合塾の小島一典・秋葉原館館長は「試験で手応えがあっても早慶に受からないケースが出ており、受験生はより下位の大学も併願するようになった」と語る。

れる」といわれる。1次選考の論文審査でも日本語での高い思考力、表現力が求められる。

そう聞くと、「AOといえども高い語学力や学力を持っていないと合格はおぼつかないのでは」と思うかもしれない。もしくは、スポーツなどいわゆる〝一芸〟に秀でた人が応募するのがAO入試だと考える人も多いだろう。

しかし「推薦やAO入試に向かない人はいない。語学力や高校の成績などで決まると思っている人が多いが、実際は違う」と指摘するのは、推薦・AO入試に強い塾として知られる「洋々」の江口輝享・GMだ。

AO入試の元祖・慶応SFCでは「入学後にSFCで何をやりたいか」を重視する入試といえる。高校時代の成績やコンテストの入賞経験が条件として課されている選考方式もあるが、広く門戸が開かれているのがA方式だ。

例えば、「独学で昆虫について深く研究し、実績を残した」など、何か極めているものがあればアピール材料になる。評定平均値（高校3年間の5段階評価の成績の平均値）が2点台であったり、高校時代に不登校となり高卒認定資格を取得して受験したり、といったケースでも合格が出ているのは、予備校、SFC関係者ともに認めるところだ。不登校の経験すらアピール材料になるという。

最難関・慶応法もAO可 SFCは塾で青田買い

一般入試では私立文系最難関の慶応・法学部もAO入試「FIT入試」で狙うことができる。地域ブロックに分けて選考される方式は評定平均値4以上が出願条件だが、A方式は誰でも出願できる。

文化、芸術、運動などの分野での活動記録を提出する必要があるが、偏差値50程度の高校出身で「部活動＋英検2～準2級」といった内容でも合格者が出ており、華々しい経歴を有している必要は